

平成29年度教育事業  
そにとキャンプ  
交流のキャンプ

1. ねらい

- ・ 体験を通して得たもの、感じたこと（進歩したこと）を再確認する。
- ・ 仲間との再会を喜び合う。
- ・ 冒険での体験を振り返り自己肯定感の再構築を行うとともに新たな目標をもつ。

2. 実施日

12月9日（土）～10日（日）（子ども）  
12月10日（日）（保護者）

3. 対象者

発達障害のある小学校3～6年生とその保護者

4. 参加者 / 募集定員

子ども 11名 / 12名（1名病欠）  
保護者 24名

5. プログラム（要約）

全3回の最終回として、子どもたちは一泊二日、保護者は日帰りキャンプを実施した。今回もキャラクター「そにと」からミッションが与えられるストーリーキャンプを行った。活動全体においては「手順カード」を活用し、「キャンプの約束」により具体的な好ましい行動を示し、達成感を味わうことができたようにした。

キャンプのスケジュール

12月9日（土）（子どもプログラム）  
「はじまりの式」  
「亀山ハイキング」  
「そにリンピック」  
12月10日（日）  
「開会式」（保護者プログラム）  
「ウォークラリー」（子どもプログラム）  
「野外炊事」（子どもプログラム）  
「親の会活動報告」「講演会」（保護者プログラム）  
「ワークショップ」（保護者プログラム）  
「そにとキャンプのふりかえり」（共通プログラム）  
「むすびの式」（共通プログラム）

12月9日（土）

<子どもプログラム>



「はじまりの式」の後に、今回もキャラクター「そにと」から「亀山ハイキング」のミッションが与えられた。登った感想を大きな声で山頂から叫び、冬晴れのもとあちらこちらで歓声が響いた。夜には「そにリンピック」に取り組んだ。「障害物競走」や「ボール運び」、「しっぽ取り」といった馴染みの



あるものから、「ユニカール」といった初めて目にするものまで、様々な種目に挑戦した。「がんばれ！」や「ありがとう」といった声が何回も聞かれ、楽しい雰囲気ので終えることができた。

12月10日（日）



<子どもプログラム>

ウォークラリーで館内外を巡りながら、これまでのキャンプを振り返るクイズに挑戦した後、「野外炊事」に取り組んだ。

食材を洗ったり切ったり、班で協力して下準備を進め、大鍋で煮込んで完成した。野外炊事も3回目となり、てきぱきと進めることができていた。午後からは、「そにとキャンプふりかえり」に取り組んだ。「交流のキャンプ」だけでなく、全3回のキャンプを通してのふりかえりを、掲示された写真を見ながら行った。

<保護者プログラム>

開会式の後、各親の会からの活動報告があった。お互いの活動を知ることにより、大きな刺激となっていた。その後、臨床心理士の西澤清香先生から講演を伺い、午後はワークショップを行った。常日頃不安に感じることから将来についてまで、子育て全般について広くテーマを設定し、意見交流を行った。

<共通プログラム>

最後のプログラムとして「そにとキャンプのふりかえり」を行った。親子それぞれが「そにとキャンプ」で感じたことやこれからの目標、普段面と向かって言いにくい思いなどについて発表する場面となった。事前に考えてきた文面やその時感じたことを言葉にし、一人一人の思いが詰まったものとなった。

むすびの式では、「そにとキャンプ修了証」が参加者全員に手渡された。修了証と共に思い出を手にした参加者は、笑顔で自然の家を後にした。

6. まとめ



今回のキャンプでも、曾爾に来るまでに、家庭で「がんばること」として「使い終わった物は、自分ですぐに片付けよう」「自分のくつは自分で

すぐにそろえよう」を提示し、その達成度を子ども達自身が確かめられるチェックシートを事前に配布した。当日提出されたチェックシートには、保護者のサインや言葉が添えられており、家庭での努力がうかがえた。



本年度より保護者プログラムは、過年度参加の「親の会」を招き、活動報告や本年度参加保護者と共にテーマに沿って意見交流を行った（ワークショップ）。こ

うした親プログラムへの参加を通して互いの絆が深ま

ったことで、今後もそにとキャンプのような体験活動をさせたいとの思いから、本年度も新たな親の会を発足させることが決まった。

そにとキャンプは、卒業したら終わりではなく、そこから始まりであるという意識のもと、縦の繋がりを重視したプログラムを構築してきた。そにとキャンプに参加したことで、子供同士が繋がり、親同士が繋がっていく。自然の家として継続的に支援していくことで、こうした繋がりを保つことができるよう、これからも取り組んでいきたい。

(主任企画指導専門職 伊藤 博之)

## 平成29年度教育事業 そにっとキャンプ 冒険のキャンプ

### 1. ねらい

- ・ 冒険的なプログラムをやり遂げることで達成感をもつ。
- ・ 協力することの大切さを実感させ、社会性を養う。
- ・ 成功体験を積み重ねる中で、自己肯定感を養う。
- ・ 保護者の交流と子育てについての意見交流をはかる。

### 2. 実施日

8月25日（金）～8月27日（日）2泊3日

### 3. 対象者

発達障害のある小学校3～6年生 12人  
及びその保護者

### 4. 参加者 / 募集定員

子ども：11名 / 12名  
保護者：11名 兄弟2名

### 5. プログラム（要約）

全3回の第2弾として、親子での2泊3日の冒険のキャンプを実施した。子どもたちは山・水の冒険に挑戦し、保護者は、ワークショップや野外炊事、子どもたちの応援など、親子別のプログラムを実施した。

出会いのキャンプ同様に「そにっと」のキャラクターを活用し、ミッションが与えられるストーリーキャンプとして実施した。活動全体においては手順カードを用い、子どもたちに各プログラムの流れを事前に提示し、見通しをもって行動できるようにした。また、「キャンプのやくそく」により具体的な好ましい行動を示し、達成感を味わうことができるようにした。

### キャンプのスケジュール

#### 【主な子どもプログラム】

8月25日（金）1日目

「はじまりの式」「山の冒険（後古光山登山）」「ふりかえり」

8月26日（土）2日目

「水の冒険・カヌー体験」「キャンプファイアー」「ふりかえり」

8月27日（日）3日目

「野外炊事」「3日間のふりかえり」「むすびの式」

#### 【主な保護者プログラム】

8月25日（金）1日目

「はじまりの式」「ワークショップ①・②」「野外炊事（子どもたちへ夕食を）」「ミニファイアー」

8月26日（土）2日目

「講義」「水の冒険の見学」「ワークショップ③」「キャンプファイアー」

8月27日（日）3日目

「ワークショップ④・⑤」「3日間のふりかえり」「むすびの式」

8月25日（金）

<子どもプログラム>

「そにっと」に招待され2ヶ月ぶりに自然の家へ戻ってきた子どもたちは、再会を喜ぶとともに新たなミッションに期待を膨らませ、はじまりの式を迎えた。



「そにっと」から最初のミッション、「山の冒険」へ出かける指示が与えられると、参加者はヘルメットをかぶってマイクロバスに乗り、後古

光山（892m）へ向けて出発した。途中、ロープが垂らされた岩場が現れると、参加者はロープを握り全身を使って登り始めた。途中の崖ではスリルを味わいながら一步一步慎重に登り、山頂にたどり着くと、達成感が笑顔として表れた。

自然の家に戻ると、保護者が作ったちゃんこ鍋と子どもたちへのメッセージが準備しており、子どもたちは感謝しながら食べた。夜、子どもたちは、テント泊を体験した。

<保護者プログラム>

地球元気村自然学校校長の奥田博氏を講師として、プログラムを進めた。自己紹介とアイスブレイクの後、ワークショップでは子どものことで困っていること等について交流した。その後は、子どもたちのためにちゃんこ鍋をつくりながら、保護者同士の交流を深めた。

夜は、ミニファイアーで炎を見つめながら、互いの子育ての心境を語り合う時間をもった。



8月26日(土)

#### <子どもプログラム>

2日目は「水の冒険」として、平成榛原子供のもり公園でカヌーのミッションが与えられた。しかし、早朝に降った大雨の影響で残念ながら実施することができなかった。



公園では、班ごとにアスレチックや広場で楽しんだ。昼食後、全員で水鉄砲を使ったゲームや水遊びを行った。他の班の子と交流を深めることができ、はしゃぐ様子が見られた。



#### <保護者プログラム>

午前中は榎原市子ども総合支援センター課長吉田昌功氏より講義を受けた。吉田氏は「合理的配慮と基礎的環境整備」「配慮・支援と自律・自立」「常識の壁」といったキーワードのもと、事前に保護者から提出された質問内容ともからめながら、講義を進めていただいた。また、講義の合間には、公園での活動にチャレンジしている子どもたちへの応援に向かった。

午後は奥田氏が、今までにそとキャンプに参加してきた母親が書いたブログの紹介や、学校との関わり方についてのワークショップ等を行いながら、保護者同士の関係が深まるようなプログラムを体験した。

#### <子ども・保護者 合同プログラム>



夜のキャンプファイヤーでは、子どもたちと保護者が一緒にゲームや歌で盛り上がり、元気な声が森の中に響いた。最後に保護者から、我が子に向けての思いを伝えた。普段、思っただけでなかなか言えないことを伝える保護者が多く、子どもたちはしっかりと受け止めている様子が見られた。

#### <子どもプログラム>

8月27日(日)

最終日、子どもたちは最後のミッションとして、「保護者においしいカレーを振舞う」ことに挑戦した。前

回の出会いのキャンプでの経験を活かして、調理とカマドの係に分かれ、野菜を切ったり、薪を割って火をおこしたり、班のメンバーで協力しながら作業を進めていた。そして、出来上がったカレーと保護者へのメッセージカードをテーブルにセットし、照れながら誘いに行く子どもたちの微笑ましい姿が見られた。

後片付けを終え、ふりかえりをリーダーと共有した後、サインカードに互いの名前やメッセージを書き合い、「交流のキャンプ」での再会を約束しあい帰路に就いた。

#### <保護者プログラム>

奥田氏がコーディネーターとなり、前年度のそととキャンプ参加者の保護者1名をパネラーとして、保護者の会を立ち上げることの意義や活動方法、現状等



について情報交換を行った。

子どもたちの野外炊事のできあがりを待ち、子どもたちが保護者を招待しに来たときに

は、お互いに抱き合ったりする姿も見られた。出来上がったビーフカレーの横には子どもたちからのメッセージも添えられており、涙ながらに読む姿があらこちらで見られた。

## 6. まとめ

そととキャンプは3回シリーズで、今回は3日間のメインキャンプであった。前回のキャンプで培った、挑戦する意欲と仲間とのつながりをより深め、協力して活動することの大切さや喜びを感じ取らせることを目指してキャンプを企画した。山・水の冒険をやり切り、仲間意識が高まった子どもたちの姿が印象的であった。

今回は、子どもたちだけではなく、保護者も参加し、親子並列型のキャンプとした。親子が別々のプログラムに取り組むことで、保護者は、我が子との関係を見つめ直し、親子の絆を深める機会になった。また、保護者同士で寝食だけでなく、ワークショップや野外炊事など協働することで、子どもたち同様につながりも深まった。アンケートには、「子どもと離れて活動することの意味や大切さを実感した」「プログラムが充実していた。ぜひ、今後も続けてほしい」との感想があった。保護者は、このキャンプをきっかけとして、今後も情報交換や交流を深めていくという意識を高め、早速、親の会の発足が決まった。

12月に実施する「交流のキャンプ」では子どもたちのさらなる成長を期待する。

(企画指導専門職 上田 考浩)

## 平成29年度教育事業

### そにとキャンプ

#### 出合いのキャンプ

#### 1. ねらい

- ・新しい仲間と出会い、親交をもつ。
- ・みんなで協力する気持ちを培う。
- ・やり遂げることの喜びを感じる。
- ・自然（光、風、水、草木）を体感する。

#### 2. 実施日

6月3日（土）～6月4日（日）1泊2日

#### 3. 対象者

発達障害のある小学校3～6年生 12名

#### 4. 参加者 / 募集定員

12名 / 12名

#### 5. プログラム（要約）

「そにと」のキャラクターを活用した、ストーリーキャンプを行った。活動全体においては手順カードを用い、活動の流れを子どもたちに事前に提示し、見通しをもって行動できるようにした。また、「キャンプのやくそく」により具体的な行動を示し、達成感を積み重ねた。

#### スケジュール

6月3日（土）1日目

「はじまりの式」「なかまづくりゲーム」  
「そにとウォークラリー」「ナイトハイク」  
「星座観察」「ふりかえり」

6月4日（日）2日目

「野外炊事」「ふりかえり」「むすびの式」

#### 6月3日（土）



「チームそにと」として、国立曽爾青少年自然の家に集まった12人の子どもたちは、開会式の後、アイスブレイクの「新聞破りゲーム」を、二日間活動を共にする仲間やキャンプリーダーと一緒に楽しんだ。その後、「そにと」からのミッションCDを聞き、班ごとに5か所のポイントを探しながら曽爾高原をめぐる「そにとウォークラリー」に出かけた。「が

んばるぞ！」を班の仲間と協力して亀山に向かって叫んだり、みんなで記念写真を撮ったりしながら、グループのメンバーや他の人とのコミュニケーションを深めた。後半のミッションであるフィールドアスレチックでは、班の仲間と協力しながら、ポイントをクリアしていった。



夜は、「ナイトハイク」と「星座観察」を行った。「ナイトハイク」では「そにとウォークラリー」と、ほぼ同じコースをたどったが、天候に恵まれ、

比較的明るい状態でのスタートであった。次第に暗くなっていく道中、不安を感じた子どもたちは、班の仲間とまとまって一緒に歩いたり、声を掛け合ったりして、不安に打ち勝とうとしていた。その後の星座観察では、望遠鏡を使って、木星のしま模様や月面のクレーターを観察し、歓声を上げていた。

#### 6月4日（日）



二日目のミッションとして、野外炊事で「お好み焼き作り」を行った。各班で、カマド係と調理係に分かれて作業を進めた。出来上がった料理をスタッフが試食をし、「協力」「味」「盛り付け」で審査を行った。それぞれの班の良さやできばえを記したチェックカードをもらった子どもたちは、仲間やキャンプリーダーと喜びを分かち合った後、食事をとった。

「ふりかえり」では、二日間の活動で自分のできたことや今後の目標をキャンプリーダーと確認した。最後に、そにとウォークラリー中に撮影した写真を入れたサインカードに、名前と一言メッセージを書いて交換し合い、「冒険のキャンプ」に思いをつなげていた。

#### 6. まとめ

ひとつひとつの「ミッション」を乗り越えていく過程を通じて、班の仲間意識が芽生え始めた。時には、自分の思いが上手く言葉で表現できなかったり、相手に伝わらなかったりしたときに、班から離れてしまう場面や、皆と同じ行動が取れず一人違う行動を取ってしまう場面も見られた。子どもたちは、そうした場面に遭遇しても、反発することなく、そっと見守ろうとする様子が見られた。今後、キャンプが進み、子どもたち同士の関わりが深まるにつれて、衝突する場面も出てくることも予想される。しかし、班としてのまとまりが出来るチャンスと捉え、チームとしての仲間意識が育まれるよう、子どもたちの活動を支援していきたい。

（企画指導専門職 伊藤 博之）